

○早田栄一郎・中村吉秀¹⁾・宮崎俊英
(長崎果樹試・¹⁾長崎防除所)

【目的】

チャバネアオカメムシの集合フェロモンには本種の他にも主要な果樹カメムシ類が誘引されることから、この誘引性を発生予察や防除へ利用する研究が行われている。本試験では集合フェロモンを利用した果樹カメムシ類の発生予察技術を開発するため、集合フェロモントラップによる誘殺数とカメムシの吸汁によってヒノキ球果上に形成される口針鞘数の関係を調査した。

【材料および方法】

長崎県西彼杵郡多良見町の温州ミカン園とヒノキが混在する地域(約2×5km)に、チャバネアオカメムシの集合フェロモン製剤2本(サンケイ化学社製)と殺虫用DDVPくん蒸剤1本を付けたコガネコール乾式トラップ(サンケイ化学社製)2基を約300m離して設置し、誘殺されたチャバネアオカメムシとツヤアオカメムシを計数した。集合フェロモン製剤と殺虫用DDVPくん蒸剤は1ヶ月おきに交換した。また同地域内のヒノキ球果を2001、2002及び2003年は3ヶ所、2004年は2ヶ所から各30果採集し、家庭用冷凍庫で凍結後、家庭用電子レンジ(500w)で約2分間解凍し、実体顕微鏡下で口針鞘数を計数した。両調査は2001～2004年の6～10月に約10日おきに行った。

【結果および考察】

調査した4年間のカメムシ成虫の発生様相は二つに区分できると考えられた。すなわち2002、2004年は越冬世代成虫主体の発生であり、2002年は8月上旬、2004年は7月下旬に誘殺ピークがあり、その後は減少する発生消長であった。一方、2001、2003年は当年世代成虫主体の発生で、9月以降に誘殺数は増加した。2001年は明瞭な誘殺ピークはなかったが、2003年は10月上旬に誘殺ピークがあった。誘殺数は2002、2004年が2001、2003年に比べ多かった。

ヒノキ球果の口針鞘は2002、2004年は6月下旬からみられ、2001年の7月下旬、2003年の7月中旬に比べ早かった。しかしヒノキ球果の口針鞘数は調査年次に関係なく、25本/果前後で増加が止まり、その後はほぼ一定状態となった。この状態に

達した時期は2002年が8月上旬、2004年が7月下旬であり、この時期は両年ともフェロモントラップの誘殺ピークと一致した。一方、2001、2003年は、両年ともに9月上旬に口針鞘数25本/果前後に達し、この時期からフェロモントラップの誘殺数が増加し始めた。

以上、調査した4年間ではヒノキ球果の口針鞘数は25本/果前後でほぼ一定状態に達した。この時期とフェロモントラップの誘殺ピークは越冬世代成虫主体の発生の年は一致したが、当年世代成虫主体の発生の年は一致せず誘殺が始まる時期と一致した。

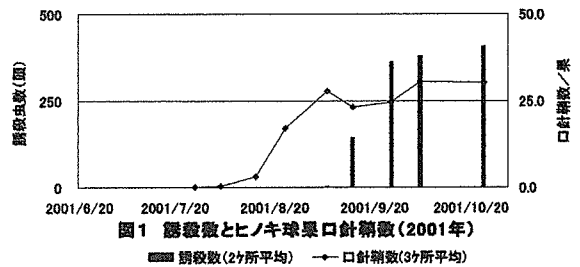


図1 誘殺数とヒノキ球果口針鞘数(2001年)

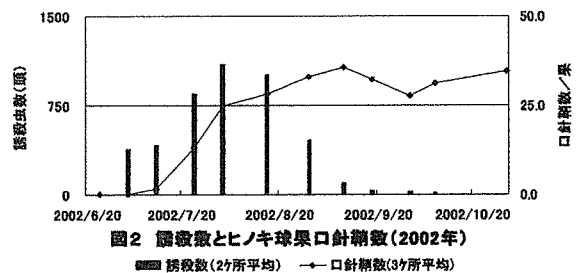


図2 誘殺数とヒノキ球果口針鞘数(2002年)

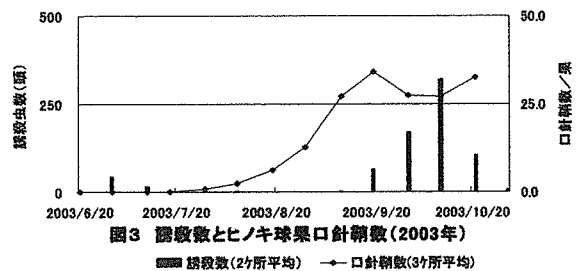


図3 誘殺数とヒノキ球果口針鞘数(2003年)

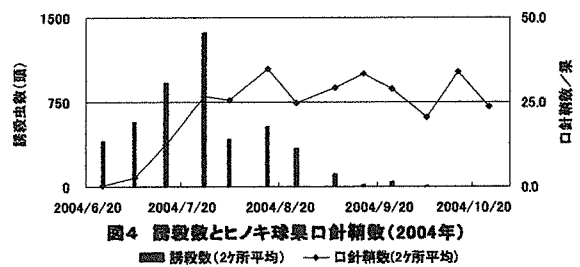


図4 誘殺数とヒノキ球果口針鞘数(2004年)